

教育新報

新大教育学部同窓会
第173号

発行人 白杵 勇人
事務局 新潟大学

教育学部内

TEL(025)263-6760

印刷所 (株) 文久堂



同窓会は教育学部と同窓生の応援隊

会長 白杵 勇人

日ごろより同窓会活動へのご理解とご協力を賜り、心から感謝いたします。四月五日、朱鷺メッセに於いて平成二十九年度新潟大学入学式が開催され、本年度がスタートしました。

皆様もご存じのとおり、平成二十八年度は、教職大学院が本格的に開始され、十九名の院生が、自分の教育的課題解決に向け、充実したカレッジライフを送っています。また、「同窓生の集い」では、全学教職支援センター特

任教授、伊藤充様から「新潟の県民性」その歴史的系譜」と題してご講演をいただきました。とても素晴らしい内容だったため、書籍化の方向だと聞いております。そして、全学同窓会交流会では、計画、準備、運営など担当学部として十分その任を果たすことができました。講演会では日和山五合目館長の野内隆裕様から「路地から進化

するふるさと新潟」という演題で、ブラタモリの裏話なども紹介していただきました。参加された皆様から「新潟らしい情緒あふれる会であった」とお褒めの言葉までいただきました。それにしても、平成二十八年度に計画した諸活動にご理解とご協力をいただき、無事終了できたことに心より感謝とお礼を申し上げます。

さて、平成二十九年度、鈴木学部長から柴田透（経済学）学部長にバトンが渡されました。副学部長には、八坂剛史教授、藤林紀枝教授、岡野勉教授が就任されました。新しい執行部の皆様と相互に連携協力し学部や学生への支援活動に努力していきたいと考えています。また、本年度から新課程の廃止で、昨年度より百五十名減、二百二十名の教員養成のみの新入生となりました。教育学部系の国立大学改革と財

政面の厳しい現状の中で、高度教員養成を担うこと、現職教員の研修の充実、教職大学院の充実などを推し進めることがより求められています。

このような時だからこそ、母校である新潟大学教育学部がより充実発展していけるよう、直接・間接的に学部や学生に支援していくこと、そして広報活動やホームページの充実、支部や学科の組織の充実と強化を図り、同窓生同士の親睦と母校の発展に寄与する同窓会活動に御協力をお願いいたします。本年度新たな取組として「カミング

ホームデイ」（六月十七日（土））を計画しました。懐かしい学び舎に集まっていたいただき、卒業生の近況報告やお世話になった教官との親睦を深める日となれば幸いです。この教育新報がお手元に届く頃には終了していますが、毎年実施していく予定です。是非とも大勢の参加をお願いいたします。また、九月二十三日（土）に行われる第四十四回「同窓生の集い」では林三枝様を講師にお迎えし「小児がんの現況と社会的支援」と題した講演会を予定しています。同窓会は教育学部と同窓生の応援隊です。同窓会としてのより良い在り方を求めると共に、大学との連携を重視しながら同窓会活動の一層の充実を目指してまいります。



花鳥風月

二月に地域のユニークな運動会に参加した。その名も「知と技と運の運動会」という。子どもから年配まで六人で一グループを作ってエントリーし、半日楽しむ。

その中で、今年初めて新潟大学の学生たちが参加し、サイコロを使ったゲームを考案し、盛り上げた。メンバーは複数の学部から集まった学生たちで、学年も異なる二十名弱のチームであった。

学生たちが用意したゲームは、地域が「いろはの里」と呼ばれていることから、その文字を使い、サイコロをみんなで投げて出た目が揃うと高得点がもらえるという工夫がされていた。

年齢に関係なく高得点が出るので、どのチームも楽しむことができた。これから、地域とのつながりを深め、関わりながら豊かな関係を築いていくことになる。この制度は『ダブルホーム』というそうである。

地域の年配者達が、若者が地域を盛り上げてくれることを心から喜び、若い力に感謝するとともに、これからの活躍を大いに期待していた。

このように、新潟大学の学生が地域とつながり活躍していることが誇らしいと思っっている。

（広報部長 本間アユ子）

評議会の報告

六月十日(土)、新潟教育会館を会場に、新潟大学教育学部新学部長、柴田透様、顧問の斎藤寿一郎様、安達徹様を来賓に迎え、同窓会の評議会が開催された。

評議会後に支部長会、学科代表者会が行われた。

評議会では、平成二十八年度の会務報告・決算報告があり、平成二十九年度の本部役員が承認された。続いて、本年度の活動の重点と各専門部の活動報告・活動計画、予算案の提案があり、いずれも全会一致で承認の運びとなった。

冒頭、臼杵勇人会長から、新潟大学教育学部に新設された教職大学院で学ぶ現職教員の姿について話があり、教職大学院での学びが現場の教育に高い効果をもたらしているという報告がなされた。

また、今後の目標として、新しい取組のカミングホームデーが、旧交を温めるいい機会になるということ、さらに、教育学部同窓会が、新潟大学教育

学部をよりバックアップしていくものになるということが力強く示された。

続いて、柴田透新学部長から、祝辞をいただいた。その中で教育学部の四つの変化について、状況報告という形で述べられた。

まずは、教育学部の定員が百五十名削減になったということ。次いで、二学期制であったものを四学期制にするということである。いずれも時代の流れに合わせ、きめの細かい大学教育をしていくという指針に基づくものであった。

さらに、学習指導要領の改訂にともなう準備を進めているということであった。最後に、教職大学院の二年目に



祝辞 柴田 透 新学部長



評議会の様子

あたり、定員増、特別支援教育の充実、専修免許取得等について新たな展望が示され、祝辞を締めくくられた。

その後会長から二十九年度の活動の重点が示された。

二十九年度活動の重点

一 「同窓生の集い」の充実

- ・ 内容を講演会とする。
- ・ 学科を中心とした絆強化の機会とする。

二 広報活動の充実

- ・ より親しまれる「教育新報」を目

指し、内容の充実を図る。大学との連携の観点から、大学の状況、教官、教職大学院等の情報も掲載する。

・ 会員の情報提供及び情報交換の場として、ホームページの活用を図る。

三 組織の充実と強化

- ・ 県外と同窓生同士のつながりを支援する。(同期の会への補助)
- ・ 各部の事業や各学科・支部の活動を基に、会員の帰属意識の向上を図る。

四 大学との連携

- ・ 母校の発展のための支援を推進する。(大学改革、新課程、教職大学院)
- ・ 学部教官の、同窓会活動への参加を働きかける。
- ・ 学部と連携して「カミングホームデー」(六月十七日(土))を開催し、教官との情報交換と絆づくりをとおして、同窓生としての帰属意識を喚起する。

五 全学同窓会との連携

- ・ 平成二十九年度的全学同窓会交流会を推進する。(医学部が企画・運営)
- ・ 「新潟大学カード」の周知を図り、加入者・利用者を増やす。
- ・ 全学同窓会賛助会費の周知を図る。

平成二十九年

専門部活動計画

◆ 研修部 ◆

部長 渡辺 真也

一 研修部活動計画

研修部では、同窓生が親睦を深めるとともに自己の人間的な資質を高めることを目的に本年度事業を以下のように計画いたしました。多数の皆様のご参加をお願いいたします。

二 事業内容

「第四十四回 同窓生の集い」

・期 日 九月二十三日（土・祝）
・会 場 アートホテル新潟
新潟駅南口直結

・講演会（二時十五分～三時四十五分）
「小児がんの現況と社会的支援」

・講師 林 三枝 様

認定NPO法人ハートリンクワ
ーキングプロジェクト副理事長
・懇親会 （四時～六時）

申込等詳細は十ページをご覧ください。
い。

◆ 広報部 ◆

部長 本間アユ子

一 基本方針

○同窓会の活動や会員、大学等の様子を紹介することにより、同窓生の士気を高める。

○大学との連携をより一層密にした広報活動の推進を図る。

二 活動内容の概要

「教育新報」年間二回発行

○第一七三号（七月二十日発行予定）

巻頭言、花鳥風月

評議会の報告

二十九年年度専門部動計画

支部・学科代表者会の報告

本部役員、支部長、学科代表一覧

二十八年年度決算報告

二十九年年度予算

教職大学院の二年目

大学教官の異動及び大学のコーナー

「同窓生の集い」の広報

○第一七四号（二月二十日発行予定）

巻頭言、花鳥風月

「同窓生の集い」の報告

学校紹介（小・中・特別支援学校）

大学のコーナー

二十九年年度会務報告

全学同窓会交流会の報告

先輩の声・学科や支部の活動紹介

大学教官との懇談会の報告

会員の広場

三 お 願 い

○大学や教職大学院の情報等を掲載や会員紹介を進めます。積極的な情報提供をお願いいたします。

◆ 組織部 ◆

部長 内木 正宏

一 活動の重点

① 支部及び学科部との連携を図り、会員の連帯意識の高揚に努める。

② 永年会員学生とその保護者に対して、同窓会活動への理解を得るよう努める。

③ 支部等の組織改編に向けた諸活動の検討を継続して行う。

二 活動の内容

① 支部長会の開催

平成二十九年六月十日（土）

支部活動の状況と課題、会費納入などの情報交換を行う。

② 学科代表者会の開催

学科の状況と課題、学科の集いの開催などの情報交換を行う。

三 その他

① 教職退職者への対応

② 学部入学生、卒業生、大学院入学生、修了生等への対応

※①②は事務局と連携して実施

③ 支部組織及び同窓会組織の再編、教員以外へ就職した方への対応

◆ 交流部 ◆

部長 永井 高志

交流部は、例年の活動に加えて、新たな活動を計画しています。会員の皆様のご理解ご協力をお願い致します。

一 新潟大学教育学部教職員と同窓会役員との「懇談会・懇親会」の開催

平成三十年一月十八日

学部と現場の双方の現状を報告し、要望を述べ合いながら、交流を深め、意思の疎通を図る。

○ 大学・学部・教職大学院の現状と主な取組

○ 卒業生の就職状況と現場との連携

○ 同窓会活動への提言 等

二 教育学部卒業生への支援（カミングホームデイの実施）

平成二十九年六月十七日

卒業生の現在の状況や学部や大学院への要望、同窓会活動への提言等について懇談を実施する。

三 各種教育関係機関、他団体等との連携の促進

全学同窓会主催の「新潟大学全学同窓会交流会・懇談会」への参加を促す。



支部・学科代表者会の報告

平成二十九年六月十日（土）評議員会に続いて、十五時から支部長会、学科代表者会を、それぞれ別室にて同時進行で行いました。組織部員の進行で始まった各部会は、それぞれが抱える課題や同窓会への思いが語られるよい会になりました。

支部長会

三十四支部中、十二支部の支部長が出席されました。高橋和人副会長の挨拶に始まり、活発な討論が進められました。

事務局から会員名簿及び会費納入について、以下のように説明がありました。

①会員名簿報告について

前年度末に各学校幹事に報告用紙を送付（五月十日を提出期限）。

平成二十九年度は、六月現在で提出校は約半数。

②会費納入について

七月の会報と一緒に学校幹事に振込用紙を送付。

③会費未納校への対応について

○十月に支部長へ納入校一覧を送付

及び未納校幹事にも督促状を送付。
○一月末に支部長へ未納校の連絡をして、督促への協力依頼。

○二月の会報と一緒に未納校幹事に再度、振込用紙を送付。

事務局説明の後、各支部とも支部長の働き掛けが大切であるという意見で一致しました。しかし、支部長の声掛けも、支部によっては学校代表者がはつきりしないところもあり、支部長が人づてに会費納入を催促するという苦労話も出てきました。また、会費納入で、既に払い込んでいる永年会員（大入学時に一括三万円を払っている）について、何年卒からなのかの質問が出され、平成二十二年度入学の学生から永年会員であることの確認がなされました。今後は、各学校において、確実な引き継ぎ、名簿作成をお願いしたいとの要望が事務局よりありました。

支部活動では、全学で講演会を行っている佐渡支部の活動が光っていました。他支部とも、支部活動を行うにあたっての規模や内容について、どのように判断すればよいのかの不安が出されました。不明な部分は、事務局に問い合わせてほしいとの要望がありました。

学科代表者会

二十九学科中七学科の代表者が出席され、高橋いずみ副会長の挨拶の後、一言ずつ現況を話していただきました。

総会の実施、大学の先生を囲むでの研修会や実践発表、卒論発表会への参加、懇親会など、開催時期や時間、内容などを工夫していることが分かりました。一方で、名簿作成が行われていない、長らく集っていないなど、課題は、学科によって様々でした。

情報交換では、次のようなことが出されました。

・退官された先生のミニ講演会を開きたい。

・学科の会費と同窓会の永年会費の兼ね合いがよく分からないので、事務局から学科代表に伝えてほしい

・全ての学科が組織を作るには無理があるのではないか。

・今後、なくなっていく学科はどうすればよいのか。

・同窓会への入会の意志を全員に確認した上で、意志のある人だけ同窓会費を納入する方法に変更する必要があるのではないか。

・他大学を卒業して、新潟大学院を修了した者の会費はどうしているのか。

また、平成十三年度に発行された教育学部全体の名簿は、それ以降作成されていないので、学科の活動を活発にするために、ぜひ事務局主導で作成してほしいとの要望が出されました。

事務局からの回答

①「学科の会費」について

☆学科の会費徴収については事務局としては関与しません。

「永年会員」「学校会員」「個人会員」のカテゴリーに関係なく学科独自の会費であることを学科の皆様に周知願います。

②「同窓会入会の意思確認について」

☆毎年度始め、提出の学校会員名簿の報告書に「印」または「サイン」の欄を設けています。このことをもって入会継続の意思確認とさせていただきます。

☆退職された皆様には、七月の新報発送の折りごとに事務局より「個人会員」として入会継続をお願いしております。

☆大学院研究科修士生の皆様にも、毎年度、三月に「入会案内」をお渡ししております。また、在学中、永年会員でなかった卒業生にも「学校会員」又は「個人会員」としての入会をお願いしています。

③「教育学部全体の名簿」について

「卒業生名簿」の改訂版に関しては平成二十七年に本部会で、検討した経緯はありましたが、見送っておりません。事務局としても、課題検討の段階とさせていただきます。

平成29年度 同窓会本部役員

〔任期は29～30年度〕

役 職	氏 名	支 部	校名など
会 長	臼杵 勇人	新潟東	東区教育支援センター
副 会 長	本間 正人	新潟東	中野山小学校
	石栗 美子	新発田	菅谷小学校
	高橋 いずみ	新潟北	葛塚小学校
	高橋 和人	長岡西	大島小学校
事 務 局	寺崎 巍	新潟西	教育学部同窓会事務局
	滝澤恵美子		
専 門 部	研 修 部	◎渡辺 真也	新潟東 牡丹山小学校
		○小泉 慎子	新潟中央 鏡淵小学校
		塚本 弓子	新潟中央 日和山小学校
		渡邊 祐哉	新潟北 早通中学校
	広 報 部	◎本間アユ子	新潟西蒲 松野尾小学校
		○金子 義則	新潟江南 早通小学校
		島垣 武	新潟西 中野小屋中学校
		佐藤紀代子	新潟西 山田小学校
		國井恒太郎	新潟南 大鷲小学校
	組 織 部	◎内木 正宏	新潟西 東青山小学校
		○小野 裕子	阿賀野 堀越小学校
		長沢 剛	新潟北 木崎小学校
		樋口 大輔	長岡西 上川西小学校
		加藤 雅晃	新潟東 桃山小学校
	交 流 部	◎永井 高志	新潟西蒲 越前小学校
役 職	氏 名	支 部	校名など
専 門 部	交 流 部	○小泉 浩彰	燕 燕市教育委員会
		木村恵理子	新潟西 新通小学校
		高橋 征也	新潟東 下山小学校
		八坂 剛史	大 学 新潟大学教育学部
監 事	事	松野 孝雄	新潟西蒲 和納小学校
		松井 裕美	新潟西蒲 新潟市立総合教育センター
		佐藤 文俊	新潟北 早通中学校
顧 問	問	中川 幸次	長岡東 自宅
		江口 直禎	新潟中央 自宅
		大関 雄策	新潟中央 自宅
		安藤 耕平	新潟西 自宅
		磯辺 浩昭	新発田 自宅
		藤井 保男	新潟東 自宅
		斎藤寿一郎	新潟東 自宅
		佐藤 重勝	新潟秋葉 自宅
		安達 徹	新潟西蒲 新潟市立総合教育センター
		白杵 勇人	新潟東 東区教育支援センター
新 潟 大 学 全 学 同 窓 会	理 事	里村 俊夫	新潟西蒲 自宅
		加藤 文子	新潟中央 中央区健康福祉課
	運 営 委 員	小竹 正子	新潟西 自宅
		岡村 浩	大 学 新潟大学教育学部
	カ ー ド 事 業	駒澤 一彦	新潟西 自宅

平成29年度 同窓会学科代表

	学科名	学科代表	校名など
1	国 語	三村 孝志	川東中学校
2	地 理	羽田 雄偉	亀田小学校
3	歴 史 研 究 室	津野 治彦	新潟市立総合教育センター
4	経 済	古井丸裕三	矢代田小学校
5	哲 倫	清野 真輝	新潟小学校
6	社 会	土田 宏美	新道小学校
7	算数（親話会）	種村 公夫	湯沢小学校
8	数 学	橋谷田 登	亀田西中学校
9	物 理	茂呂 良彦	紫雲寺小学校
10	化 学	栗林 操	三川小学校
11	生 物	緒方 猛	新潟市教育委員会地域教育推進課
12	地 学	高橋 克哉	東小学校
13	英 語	佐藤 政志	第一中学校
14	音 楽	斎藤 隆	両川中学校
15	美 術	永井 高志	越前小学校
16	保 健 体 育	渡辺 義光	新津第五中学校
17	家庭〔萌木会〕	渡辺 祐子	自宅
18	職 業 指 導	松村 明彦	自宅
19	教 育	山岸 真夫	自宅
20	教 育 心 理	岡田 義則	附属特別支援学校
21	技 術	渡邊 勝	石山中学校
22	特別支援教育	安藤 淑美	附属特別支援学校
23	養教特別別科	大関 千春	柏崎小学校
24	幼 児 教 育	近藤 和徳	新津第一小学校
25	学社ネットワーク	小柳加奈子	田上町役場
26	生 活 科 学	眞邊麻依子	白根第一中学校
27	生 活 シ ス テ ム	大森 山	城西中学校
28	健康スポーツ	大口 良平	大町小学校
29	書 道	岡村 浩	新潟大学教育学部

平成29年度 同窓会支部長

地域	番号	支 部	支部長	校名など
上 越	1	上 越	仁田 秀三	南川小学校
	2	長 岡 東	山本 俊介	中越教育事務所
	3	長 岡 西	高桑 康博	大島小学校
	4	三 条	五十嵐 晃	一ノ木戸小学校
	5	柏崎・刈羽	寺井 昌人	鯨波小学校
	6	小 千 谷	小方 邦雄	片貝中学校
	7	加 茂	藤田 敏樹	須田小学校
	8	十日町・津南	庭野 紀元	川治小学校
	9	見 附	吉田 孝則	見附小学校
	10	燕	洪水 保之	栗生津小学校
	11	魚 沼	小栗 歩実	小出小学校
	12	南 魚 沼	佐々木政彦	大巻中学校
	13	弥 彦	山宮 尚	弥彦中学校
	14	田 上	多々良儀仁	田上中学校
	15	湯 沢	種村 公夫	湯沢小学校
	16	出 雲 崎	長尾 昭浩	出雲崎小学校
中 越	17	新 潟 北	川又 健司	太夫浜小学校
	18	新 潟 東	諸橋 智	下山小学校
	19	新 潟 中 央	坂井 純	万代長嶺小学校
	20	新 潟 江 南	内山 英紀	東曽野木小学校
	21	新 潟 秋 葉	石坂 優彦	小合小学校
	22	新 潟 南	金塚 一明	根岸小学校
	23	新 潟 西	青木 清美	黒埼南小学校
	24	新 潟 西 蒲	齋藤 淳	中之口東小学校
	25	新 発 田	磯部 裕之	外ヶ輪小学校
	26	村 上	鈴木 正美	村上小学校
	27	五 泉	神田 武司	村松小学校
	28	阿 賀 野	六井 和幸	水原小学校
	29	胎 内	天井 弘	胎内小学校
	30	聖 佐	佐藤 紹夫	蓮野小学校
	31	阿 賀	栗林 操	三川小学校
	32	関 川	今井 学	関川中学校
	33	粟 島 浦	田巻 元子	粟島浦小学校
	34	佐 渡	新発田 靖	両津小学校

平成28年度 一般会計決算報告

1. 収入の部 (▲は、予算に対して減)

項 目	28年度決算額	28年度予算額	増 減	摘 要
1 繰 入 金	8,180,000	8,180,000	0	総合会計から繰入れ
2 雑 収 入	24	400	▲ 376	銀行利息
合 計	8,180,024	8,180,400	▲ 376	

2. 支出の部 (▲は、予算に対して減)

項 目	28年度決算額	28年度予算額	増 減	摘 要
1 会 議 費	117,460	130,000	▲ 12,540	本部会、会計監査、評議会、役員会等 (会場費、お茶代等)
2 旅 費	248,680	250,000	▲ 1,320	役員旅費、会員旅費
3 助 成 費	482,700	500,000	▲ 17,300	学科助成、支部助成、同期の会助成
4 事 務 局 費	455,857	600,000	▲ 144,143	消耗費、電話代、光熱費、封筒印刷代、印刷紙代、送料等
5 研 修 費	276,672	400,000	▲ 123,328	同窓生の集い企画運営費 (会場費、講師謝礼、参加助成等)
6 広 報 費	1,373,588	1,600,000	▲ 226,412	機関紙発行代、発送代、H P 更新手当、パンフNo.6 作成代
7 組 織 費	64,400	120,000	▲ 55,600	名簿メンテナンス代、住所変更はがき印刷代
8 交 流 費	118,592	120,000	▲ 1,408	学部との交流会企画運営費 (会場費、参加助成等)
9 大学・学生支援費	1,352,328	1,500,000	▲ 147,672	研修会参加助成、卒業制作展助成、卒業祝賀会助成等、カレンダー作成
10 全学同窓会費	984,290	1,000,000	▲ 15,710	負担金、全学交流会助成、運営委員旅費等
11 渉外・厚生費	112,392	100,000	12,392	附属校研究発表会等祝儀、新潟教育会館寄付等
12 人 件 費	1,740,000	1,740,000	0	事務局報酬 2 名
13 その他予備費	395,167	120,400	274,767	印刷機、ノートパソコン (ソフト代、設定料含む)、通信費他
合 計	7,722,126	8,180,400	▲ 458,274	

3. 残高の部 8,180,024円－7,722,126円＝457,898円 *残金は平成28年度総合会計へ繰り出します。

平成28年度 総合会計決算報告

1. 収入の部

項 目	28年度決算額	28年度予算額	増 減	摘 要
1 繰 越 金	44,662,686	44,662,686	0	前年度繰越金
2 学校会員会費	3,194,290	3,200,000	▲ 5,710	会費一振込手数料 497校・3247名
3 個人会員会費	282,306	220,000	62,306	会費一振込手数料 317名
4 永年会員会費	10,188,106	9,600,000	588,106	会費一振込手数料 341名
5 繰 入 金	457,898	0	457,898	*一般会計への繰出金に残金が出た場合、年度末に繰入
6 雑 収 入	3,829	4,000	▲ 171	銀行利息など
合 計	58,789,115	57,686,686	1,102,429	

2. 支出の部

項 目	28年度決算額	28年度予算額	増 減	摘 要
1 一般会計繰出金	8,180,000	8,180,000		一般会計で年度末に出た残金は、総合会計へ戻す。

3. 残高の部 58,789,115円－8,180,000円＝50,609,115円 *残金は平成29年度総合会計に繰り越します。



*タイサンボク (モクレン科)
*開花時15～20cm
*大学の良寛ブロンズ像の後ろにあり
*毎年6月末～7月初めに開花

◎新しくおいでになった先生
准教授 齋藤 暁史 (教職指導)
平成二十九年 四月

◎学部を去られた先生
教授 木村 政伸 (学校教育学)
平成二十八年八月末転出
教授 富田 健之 (社会科)
平成二十九年三月末転出
准教授 古田 徹也 (社会科)
平成二十九年三月末転出
准教授 山本 啓介 (国語科)
平成二十九年三月末転出
准教授 大平 淳一 (教職指導)
平成二十九年三月末転出

大学教官の異動
(昨年の七月以降)

平成29年度 一般会計予算

1. 収入の部 (▲は、28年度に対して減)

項 目	29年度予算額	28年度予算額	増 減	摘 要
1 繰 入 金	8,180,000	8,180,000	0	総合会計から繰入れ
2 雑 収 入	100	400	▲ 300	
合 計	8,180,100	8,180,400	▲ 300	

2. 支出の部 (▲は、28年度に対して減)

項 目	29年度予算額	28年度予算額	増 減	摘 要
1 会 議 費	120,000	130,000	▲10,000	本部会、会計監査、評議会、役員会等
2 旅 費	250,000	250,000	0	役員旅費、会員旅費
3 助 成 費	500,000	500,000	0	学科助成、支部助成、同期の会助成
4 事 務 局 費	500,000	600,000	▲100,000	消耗費、電話代、光熱費、封筒印刷代、印刷紙代、送料等
5 研 修 費	400,000	400,000	0	同窓生の集い企画運営費等
6 広 報 費	1,400,000	1,600,000	▲200,000	機関紙発行・封入代、送料、パンフNo.7作成
7 組 織 費	370,000	120,000	250,000	名簿メンテナンス代、クリアファイルホルダー作製
8 交 流 費	230,000	120,000	110,000	交流会企画運営費、カミングホームディの参加助成
9 大学・学生支援費	1,450,000	1,500,000	▲50,000	研修会参加助成、卒業制作展助成、卒業祝賀会助成等、カレンダー作成
10 全学同窓会費	1,000,000	1,000,000	0	負担金、全学交流会助成、運営委員旅費等
11 渉外・厚生費	100,000	100,000	0	附属校研究発表会等祝儀、香典、会場借用費等
12 人 件 費	1,740,000	1,740,000	0	事務局報酬 2 名
13 その他予備費	120,100	120,400	▲300	
合 計	8,180,100	8,180,400	▲300	

平成29年度 総合会計予算

1. 収入の部 (▲は、28年度に対して減)

項 目	29年度予算額	28年度予算額	増 減	摘 要
1 繰 越 金	50,609,115	44,662,686	5,946,429	前年度繰越金
2 学校会員会費	3,000,000	3,200,000	▲ 200,000	会費一振込手数料
3 個人会員会費	220,000	220,000	0	会費一振込手数料
4 永年会員会費	6,000,000	9,600,000	▲ 3,600,000	会費一振込手数料
5 繰 入 金	0	0	0	*一般会計への繰出金に残金が出た場合、年度末に繰入
6 雑 収 入	4,000	4,000	0	銀行利息など
合 計	59,833,115	57,686,686	2,146,429	

2. 支出の部 (▲は、28年度に対して減)

項 目	29年度予算額	28年度予算額	増 減	摘 要
1 一般会計繰出金	8,180,000	8,180,000		



◎会費納入のお願い

二十九年年度会費の納入をお願いいたします。県内教職員の皆様は、学校・機関単位での入金となりますので、代表者にお届けください。

代表者の方には大変お手数をお掛けしますがよろしく願います。
個人会員の方には、個別に振込用紙をお送りします。

◎学科代表・支部長の皆様へ

評議会にご都合がつかず、出席できなかった皆様に助成金を送りましたのでご確認ください。また、当日の資料も送りましたので、ご覧ください。

◎学校幹事の皆様へ

今年度、実践研究等の発表会開催を予定しておりますら、お知らせください。同窓会ホームページ上でもご紹介いたします。

◎全学同窓会交流会のご案内

今年も講演会と懇親会を計画しています。

期日は十月二十九日(日)です。
ご参加のほどよろしく願います。
懇親会へ参加者には会費の半額を補助しています。

教職大学院二年目の挑戦

新潟大学教職大学院

特任教授 高橋 雄一

同窓会員の皆様の願いでもあった教職大学院が平成28年に設立され、本年二年目の挑戦が始まっています。

教育学部の教員や事務職員が真摯な検討を重ね、全国にも誇るべきシラバスや学びのシステムが作られました。「教育新報第一七一号」においても、現場からの派遣院生が、教職大学院での学びを生き生きと記述しています。柴田研究科長、小久保専攻長のもとに、九人の研究者教員と六人の実務家教員と院生が一緒になって教職大学院を作り上げているといってもよいでしょう。私が考える、本年の教職大学院としての大きな挑戦は次の二つです。

一、「学び続ける教師」の誕生

新潟大学教職大学院にとって初めての修了生が誕生します。「同僚性と協働性をもって教育課題を解決することの実践知の創造」を目標に学んだ院生たちです。その実践知を修了報告書としてまとめ、世に問うことになりました。しかし、大切なことは二年間の学びを通して、現場に帰ってさらに同僚に、地域に、新潟市や県教育界に対し、自らの実践によって貢献することです。そのような「学び続ける教師」として、

学校作りのリーダーとして、育つてほしいと思います。

二、現場と教職大学院の学びの往還

当院の大きな特色は、学校現場が直面する課題を解決・克服するための高度な実践力を育成することにあります。院生の所属する連携協力校や特定連携協力校での課題を教材として学ぶことによって、自らの資質・能力を向上させると同時に、その学びを現場や地域の中に還していくことが大切です。

院生を派遣した学校や地域が、「院生を派遣してよかった」「大学が学校や地域のために貢献してくれた」、こんな声が聞こえるような教職大学院を作りたいと思っています。常に、現場と共に学び続け、教員の資質・能力を育てることを通して、地域と学校と共に教育活動を進める推進センターになりたいと考えています。

当院は、新潟市教育委員会、県教育委員会、そして同窓会の皆様のご支援をいただきながら成長してきました。本年も、皆様のご期待に応えるべく、新潟大学教職大学院関係者一丸となって進んでまいりたいと思っています。

教職大学院二年目を迎えて

新潟大学教職大学院

長谷川 美鈴

昨年度からスタートした新潟大学教職大学院に入学しました。現在、十三名の現職院生と、六名の学部新卒のストリートマスターと一緒に学んでいます。二年目を迎え、昨年度に引き続き、学びの多い刺激的な毎日を過ごしています。

学部新卒生であるストリートマスターは教育実践コースに所属し、実習校で教職の仕事内容を学ぶとともに、自分の研究を進めています。私は、通常学級における特別支援について学びを深めたいと思い、教職大学院への入学を希望しました。特別支援の専門的な知識を学べる講義、現場の先生方との交流、そして子どもの変化を長い目で追うことのできる長期実習が非常に魅力的でした。また、一年間の学びを通じて、特別支援の観点と学校体制、地域や外部機関との連携などについて、新たな視野をもつことが出来ました。二年目である今年度は、一年目で得られた知見を改めて見つめ直すこと、また、それらを生かし、実践の中で力を発揮していくことを目標として実習に励んでいます。昨年度に引き続き、

実習校の先生方の授業観察、また、授業実践とその省察を重ねる日々を送っています。たくさんの方の先生方の授業を見させていただき、また実際に授業をさせていただけるという素晴らしい学びの環境を整えていただけていることに感謝しています。課題研究も昨年に引き続き、月に二回、実習校において行われています。今年度は昨年度よりさらに、授業に焦点をあてた話し合いを繰り返しています。課題についての分析や検証について熱心に指導をしてくださり、実践へのモチベーションにつながっています。自分の実践と先生方の授業観察を繰り返す中で、ベテランの先生方の技を授業で取り入れるにはどうしたらいいか、研究の視点を授業に上手く生かすにはどうすればいいのかと試行錯誤の毎日ですが、授業に反映できるよう努めてまいります。これから現場に出て行くうえで、学べることがまだまだたくさんあることを、実習を通して日々実感しています。残された一日一日を大切に、学びを深められるよう励んでいきます。

大学のコーナー

自己紹介とご挨拶

副学部長 藤 林 紀 枝

今年の四月から副学部長になりました。学部執行部の仕事は不慣れですが、これからどうぞよろしくお願いします。

まず自己紹介ですが、私の専門は地質学です。島弧システムにおける背弧海盆のマグマの生成過程と、火山活動の様式に興味を持っています。日本海は約二二〇〇万年前から一五〇〇万年前までの間に形成された背弧海盆で、その時期に海底で形成された火山岩が主な研究対象です。

プレートが押す力が働く日本のような場所でも、なぜ背弧海盆が形成されるのかは、これまでよくわかっていませんでした。まだ日本海が拡大した理由については論争中ではありますが、最近の数値シミュレーションからは、次のようなシナリオが示されています。

日本海溝から沈み込んでいく太平洋プレートは、地球内部の深さ約六六〇キロメートル付近に広く滞留していることが地震波トモグラフィーから示されています。深さ六六〇キロメートルは上部マントルと下部マントルの境界

にあたり、ここではマントルの密度が急に大きくなります。沈み込んだプレート（スラブという）の密度は下部マントルより小さく、そのためこの境界を横切つてそのまま下部マントルに侵入することができません。よって、上部マントルと下部マントルの境界に沿って、しばらくはほぼ水平に滞留すると考えられます。下部マントルに到達するとスラブがたわみ、合わせて、プレートが沈み込む場所である海溝の太平洋側への移動が引き起こされます。それによって大陸は、断層を形成しながら薄くなつていき、ついに背弧海盆が形成されるというシナリオです。

私の研究は、薄くなった背弧海盆の下に上昇してきたマントルからできるマグマを研究対象としています。火山から噴出したマグマが固結した物質、つまり「岩石」の中に、マントルでの物質循環の証拠を求めるものです。地震波トモグラフィーや前述のコンピュータシミュレーションのように、地球物理的な手法の研究ではなく、物

質科学的な研究です。調査や分析して得た事実を基に考察する点で実証的ですが、複数の種類の分析が必要で、結構時間と手間のかかる研究分野です。岩石の切片（薄片）を偏光顕微鏡で観察・記載し、細かな部分を分析し、また岩石を溶解して微量の元素や同位体の分析を行います。それらを基に、起源となったマントル物質の特徴を追います。共同研究者と行ってきたこれまでの研究で、西日本では日本海を中心部から両側に向かって、起源マントルの系統的な組成の変化があること、マントルが溶融したマグマとスラブ由来する流体またはマグマが一般的に存在することなどがわかっています。

また、佐渡島の小木半島や新潟市の角田から弥彦山塊の海岸部に露出する海底溶岩流や、海底溶岩噴泉堆積物の地質調査を行っています。背弧海盆の溶岩流と中央海嶺やホットスポットの溶岩流との類似点、相違点を明らかにし、古い時代の地層ができた環境の推定、惑星地球の発達史に貢献できることを目指しています。

さて、大学は今、国の教育改革、運営費交付金の削減をどう乗り切るかで大変な時です。その中で、教育学部は今年度から、学習社会ネットワーク課程、芸術環境創造課程、健康スポーツ科学課程、生活科学課程の四つの課程の学

生募集を停止し、学校教員養成課程のみとなりました。多様な学生さんから、教員も良い刺激を受けてきましたが、三年後に四つの課程が廃止になるのは寂しいことです。改組については、大学執行部からさらなる検討を要請されており、現在も議論を重ねている最中です。

また、教育職員免許法の改定に伴い、学部はカリキュラムの見直しを行っているとあります。文部科学省から示されている教員職員免許法施行規則の変更案では、「教科の指導法」が「教職に関する科目」の括りから外れ、教科内容の科目と一緒に「教科に関する科目」に括られることとなります。加えて、この「教科に関する科目」の最低修得単位数は減ります。これは、教員を目指す学生の専門的知識を低下させる可能性があり、ひいては中学校、高等学校の生徒の学力に、大きな変化をもたらすことを危惧しています。新学習指導要領「生きる力」では、問題解決能力の養成が大きな目標となっていますが、身の回りの事象に興味を持たせ、生徒の発想力を育てられる教員を養成することこそが、重要ではないかと私は考えます。同窓会の皆様には、ご経験を活かしただご意見を是非とも学部にお寄せいただきたいと思いますし、これからも引き続きお力をお貸しただけますようお願い申し上げます。

講演会



認定NPO法人

ハートリンクワーキングプロジェクト

小児がんの現況 と社会的支援

期 日

平成29年

9月23 日 (土) 秋分の日

13時30分受付開始

入場無料

どなたでも入場
できます

講 師

認定NPO法人ハートリンクワーキング
プロジェクト 副理事長

林 三枝 氏

会 場

アートホテル新潟 越後 (東) の間

新潟市中央区笹口1-1

☎025 (240) 2111

日 程

13 : 30 ▶	受付 開 会
14 : 00 ▶	
14 : 15 ▶	
	講演会
15 : 45 ▶	移 動
16 : 00 ▶	
	懇親会
18 : 00 ▶	

懇親会

～「第44回同窓生の集い」のお誘い～

新潟大学教育学部の卒業生の方は懇親会に参加してください。
参加希望の方は、会場準備の都合がありますので、9月15日
までにご連絡ください。懇親会費は3000円です。

新潟大学教育学部
同窓会事務局

tel&fax 025 (263) 6760

mail:

dousou@ed.niigata-u.ac.jp

※火曜から金曜までの13:00から17:00の間にお願いたします